

第25卷
雲を笑いとばして

第25卷

雲を笑い飛ばして

理論社



今江祥智 の本

第25卷

雲を笑いとばして

理論社

今江祥智の本第25巻

一九九一年四月初版

一九九一年四月第一刷

著者 今江祥智 ©

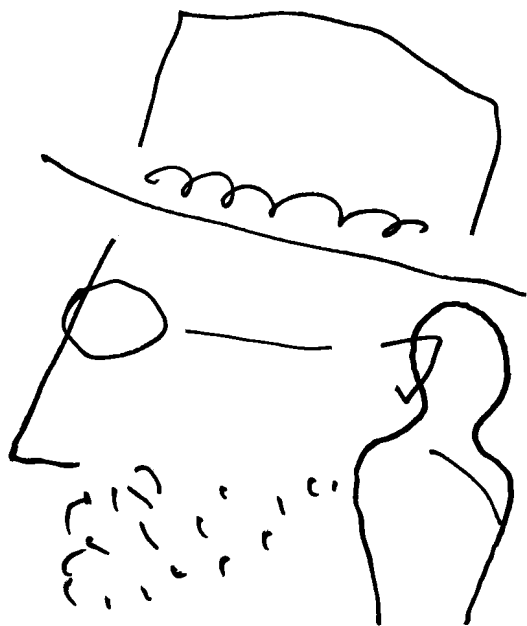
発行 株式会社理論社

東京都新宿区若松町一五―六

電話〇三(三二〇三)五七九一 〈代表〉

振替東京九―九五七三六

落丁・乱丁本はお取り替えます。



MATISSE

雲を笑いとばして

第一章 バトボン 一九五四年春 7

第二章 オマン・オロン 一九五二年 38

第三章 イモ・モンタン 一九五四年 70

第四章 慈愚主水・フロイト 一九五四年 102

第五章 ショスタコービッチ 一九五四年 132

第六章 ジェームス・キーン 一九五五年 161

第七章 アラゴンうさぎ 一九五六年

190

第八章 ジャン・ギャバジン 一九五六年冬

220

第九章 イヴ・モンタン 一九五七年春

250

第十章 アンリ・ピカソ(?) 一九五七年夏

278

第十一章 ボール・エリュアール 一九五七年秋

309

第十二章 ジーン・ケリー 一九五七年冬

341

あとがき

371

解説 山田太一

374

編集 小宮山量平

装幀 平野甲賀

装画 長新太

制作 山村光司

発行 鈴木良司

製作担当 金井重雄

下向実

編集担当 日比野茂樹

高林久美子

成澤栄里子

製作 P & P

本文 加藤文明社／よねむら写植

表紙 ダイニツク

カバー トラヤ印刷

製本 誠製本

用紙 十条製紙／日興紙業

今江祥智の本
第25卷

雲を笑いとばして

第一章 バトボン 一九五四年春

1

終りそうで終りそうもないのがベートーヴェンの音楽というものである。高志^{なみし}には、そのことが骨身にしみている。

十年前。高志は正座してベートーヴェンを聞いていた。いや、聞かされていた。聞かせていたのは、兄ちゃんである。高志は二階の兄ちゃんの部屋の隅っこにかしこまって座り、電気蓄音器から流れるベートーヴェンの交響曲に耳を傾けていた。一枚が終ると、兄ちゃんはやうやうやしく次のレコードにかけかえる。落とせば割れるレコードだったから慎重なのである。そのあいだだけ、高志はそっとひざをくずした。むろん、兄ちゃんには分らないように、である。

ベートーヴェンはつづく。正座もつづく。がまんはつづかない。しびれがぎれてくるからである。高志はベートーヴェンを呪い始める。どうしてまたこんなに長い曲を作ったのか。いったい誰のために。いったい何のために。ベートーヴェンは終りそうで終りそうにもない。高志はあしの感覚がなくなってくる。これでは終ってもす

ぐには立てない。拍手してもあしにひびく。がまんすると眉間にたてじわが寄った。それではベートーヴェンに失礼である。兄ちゃんの目がそういつている。高志は目を閉じて闇の中でベートーヴェンを聞いた。

それでもやっと、ベートーヴェンも終った。兄ちゃんは感動で心がしびれているのか、しばらくものも言えないでいる。高志はあしがしびれて、ものを言うところではない。言えは、タタタタタ……しかない。けれど兄ちゃんは、そんな高志のを見て、弟も自分と同じようにベートーヴェンに感動のあまり口がきけないものだと思手に考えていた。

高志は、そのとき十二歳であった。

いま、高志は二十二歳になっている。

そして、あいかわらず正座してベートーヴェンを聞いていた。いや、聞かされていた。聞かせていたのは古山先生である。高志の大学のときの美学の先生であった。高志は先生の家の奥座敷の隅っこにかしこまって座り、新型のプレイヤーが奏でるベートーヴェンの室内楽に耳を傾けていた。ようやく片面が終ると、先生はレコードを裏返した。そのちょっとしたのまだけ、高志はそっとひざをくずした。むろん、先生には気づかれないように、である。

ベートーヴェンはつづく。正座もつづく。がまんはつづかない。十年前は五分に一度、レコードを裏返し、十分に一度レコードをかけかえねばならなかった。しかし先生のはLPレコードである。長時間演奏レコードなのである。二十分はがまんしていなければならなかった。とつくにしびれがきれていた。高志はベートーヴェンを呪い始める。どうしてまたこんなに長い曲を作ったのか。いったい誰のために。いったい何のために。ベートーヴェンは終りそうで終りそうにもない……。

(交響曲でも室内楽でも同じちゅうとこがまたベートーヴェンはんらしいけどなあ……)

高志は、うなだれてそう思う。

(室内楽くらい、もうちょっと短いのにしといってくれたらよかったのに……)

そやさかい女性にもめてへんかったンとちがいますやろか……と心の中で毒づこうとしたところで、ようやくベートーヴェンが終ってくれた。

―弦楽四重奏曲第十五番イ短調作品一三二でした。

先生がまるでドイツ語のようにつぶやかれる。高志は目の前のレコード・ジャケットをにらみつけて、ついついそれがまちがいでないことを確認していた。

―どうでしたか？

先生は丁寧な口調でたずねられる。

―……はいや、たいへん結構でした。

高志は、お点前のときのように、かしこまって答える。先生はひとつうなずいた。

―これで第十二番変ホ長調、第十三番変ロ長調、第十四番嬰ハ短調、第十六番へ長調と、ベートーヴェン後期の四重奏はみんな聞いたことになります。

―……はいっ。

五夜連続だったわけか……と思いながら、高志はひざのあたりをもぞもぞさせた。

―あ、楽にして、楽に。

先生は驚いたように、そんな高志を見下ろして声をかけた。先生はずっと椅子に座って聞いておられたのである。

―正座でしたか、ずっと。

—あ。はい。ずっと。

—それはたいへん。ずっとでしたか。

—はい。いえ。いえ、大丈夫でタタタ。

高志は、つい声をあげてしまった。

隣の部屋からふすまごしに、遠慮のない笑い声がすると、その声が高志に呼びかけていた。

—冬野さん。紅茶がはいりましたア。

—はアタタタ。

ちゃんと返事ができないのが情けなかった。何だか十年前とそっくりなことをくり返してるな……と思いながら、高志はようやく立ち上がった。

（そやけど、あの声は十年前にはないものやった……）

そう思い直しながら高志はふすまを開けた。ふたごの姉妹である宇乃ちゃんと志乃ちゃんが同じ目をして笑っていた。さっき笑い声をたてたのはどちらだったのか、高志には見当がつかなかった。高志はふたりに等分に会釈すると、四日前から自分の席になっている椅子に腰をおろした。

—ご苦労さまです。

皮肉ではなくて真面目にそう言ってくれたのは、姉妹の兄貴の浩くんであった。色白の、凜凜^{リッリッ}しい顔つきの、まだ高校生である。

—父のお相手はたいへんでしょう。

低^{こごえ}声だが、ゆったりした口ぶりで浩くんがそう慰めてくれると、高志には相手が自分と同年の大人に思えてくる。そこへ先生が台所に入ってきた。

「ぼくのお相手がたいへんじゃないんだよ、浩。ペートーヴェンがお相手だからたいへんなんだよ、おたがいに。そうでしょう、冬野さん。」

先生は、高志が大学を出ると、さんづけで呼んで下さったが、高志はまだなれることができないので、ついつい、はいっ、はいっ……というふうにしゃっちょぼって答えてしまう。そしてそのたびに決まって姉妹に笑われてしまうが、直すことができなかった。

紅茶をゆっくりと飲みおえてから、先生は高志にむき直った。

「どうですか、学校のほうは？」

先生の口ききで勤めることになった短大助手のことをきかれて、高志はまた正座しなくなった。就職口を世話してもらったことについてのお礼も、まだろくに言っていないことを思いおきたからである。それどころか、急に決まったこの地での就職だったため、下宿を見つける時間がなくて、とりあえず家にきたまえ……という先生の言葉に甘えて、ここに「下宿」させてもらって五日目になる。

うかつにも高志は、先生に何人子どもがあるかをたずねなかった。家がどのくらいの広さなのかもきかなかった。先生の葉書一枚を頼りにここを訪ねてきた。四日前のことである。わりもなかった。高志は就職のほうは、大阪で参考書出版をしている先輩を頼って、そこに勤めるつもりでいた。先輩との口約束もできていた。そのことを聞いた先生から「待った」がかかったのは、卒業論文提出の日であった。先生は、高志がもう少し勉強をづけられるような仕事を見つけてあげようと言われたが、高志は正直なところ、期待はしていなかった。ところが、三月中旬になって一通の電報が届いた。

『シューシヨクキマッタスグコラレタシ』コヤマ』

高志は、その口をほとんどあきらめていて、ちょうど前日、先輩の会社に挨拶にいつてきたところだった。狼

狼した高志は、電報をにぎっておふくろさんに相談した。明治生れのおふくろさんは話を聞くなり、

「先生と先輩とは、どっちが上だす？」

と、問い直した。

「そら、先生やわ。」

高志が答えると、おふくろさんは大きくうなずいた。

「先生の言わはるようにすることだす。」

それで決まりだった。従順な息子はもう一度先輩を訪ねて事情を話して詫び、こんどは先生の葉書をにぎってその家を探して訪ねたというわけであった。

*

先生の家は名古屋城沿いの広い坂の下にあるらしかった——というのは、先生の葉書に描かれた地図ではそうなっていたからである。けれど、実際に高志が坂の上から見渡したところでは、坂の下には木造の小さな住宅群が並んでいるばかりであった。のんびりやの春一番が吹いてくれたおかげで、坂道には土煙が舞い、そのむこうに見える小住宅群を灰いろのはこりで何だか頼りな気なものに見せてくれた。

高志が想像していた先生の家というのは、何しろ大学教授のものだから、瀟洒な洋館しょうやつきの昔風な建物であり、高志の借りるのは、さしずめその離れとでもいったつもりでいた。しかし、目の届く限りのところには、そうした建物はなかった。高志は少しずつ不安になりながら坂をおりていった。

「公務員住宅W・Dの15か……。」

葉書の住所を何度も見直し、口にも出しながら、高志はその住宅群のはずれのところまでおりてきていた。

「W・A」という大きな表示があり、家は手前から順に12345……というふうに並んでいた。そして隣の

住宅群が「W・B」である以上、先生のところは四番目の住宅群のはずだった。そう見当をつけて四番目のブロックの角まで足早にいった高志は、その最初の家の表示が「W・E」とあるのを見て戸惑ってしまった。「W・D」はどこへいったのか。抜かされてしまったのか。

高志はあわてて一ブロック戻ってみた。するとそこが「W・D」のブロックであった。抜かれていたのは三番目の——「W・C」のブロックであった。

（そうか。そやったンか。W・Cじゃしかたないわな……）

吹き出すのをこらえて、高志は顔をひきしめた。何しろ初めて訪ねる家なのである。誰が顔を出されるかわからない。そしてそのときになって、高志は先生の家の家族構成のことを何ひとつ聞いていなかったことに気がついていった。

家はどれも同じ大きさであった。平屋で、そんなに広くはない。部屋数にすればせいぜい三つか四つというところだろうか。それなら、先生の家族もそんなに多くはないにちがいない。何しろ自分を「下宿」させて下さるというのだから……。

勝手に見当をつけながら、高志は12、13、14と数えていって15番目の家の前に立った。

表札にははっきり古山 貴とあった。たかしと読んで高志と同じ名になる。そもそも、先生に親しくしていただいたのも、名前のことがきっかけであった……。

そのときのことを高志が思いおこすいとまもなしに、いきなりうしろから声をかけられていた。

—冬野さんでしょ。

ふりむくと、明るい声そのまま顔になったような少女が立っていた。買物袋をさげている。

—古山志乃です。今日おいでになること、父に聞いておりました。

まだ中学生くらいの感じなのに、ちゃんと一人前のご挨拶であった。高志も神妙に最敬礼していると、表戸が開く音がした。

——いらっしやい、冬野さん。

聞いたような声だと思ったが、それもそのはず、今しがた聞いたばかりの——うしろからかけられた声とそっくりのものであった。いつのまにまたうしろにまわったのか。驚いて高志が頭をあげると、目の前にはちゃんとさきほどの少女が立っていた。もう一度驚いてふり返ると、玄関先にその少女がもう一人立っているではないか。高志は、あつけにとられて二、三度回転してしまった。

高志をはさんで、まったく同じ顔の少女が二人立っているのだった。

——あ、これは、そのう……。

——おっしゃりたいのは、ふたごですか——でしょ。

玄関の少女が言った。

——わたし、姉の宇乃です。

そして姉さんらしく、さっきの少女よりもややしとやかに頭をさげた。高志はあわててもう一度最敬礼した。その頭があがらないうちに、家の中から別の声がかけられた。

——やあ、高志さんですね。

親し気に名前を呼ぶのでいそいで顔をあげると、涼し気な目の少年が笑っていた。

——浩です。高志さんのことは兄と思えて父に言われてたものですから、いきなり名前でお呼びして失礼しました。

三人とも見かけよりもずっと大人っぽく礼儀正しいのであった。